

せんぞく 史跡千足古墳発掘調査現地説明会

岡山市教育委員会

日時：平成25年1月26日（土）13:30～

場所：岡山市北区新庄下（千足古墳）

はじめに

岡山市教育委員会では、史跡千足古墳の保存事業に伴い、千足古墳の正確な形状や規模を調べるため、平成24年11月より発掘調査を進めてきました。このたび調査がほぼ終了したため、みつかった遺構や遺物を公開することとなりました。

千足古墳について

千足古墳は、造山古墳群とされる、6基の古墳の中の一つです。現地表の観察では墳形は前方後円墳で、前方部が後円部に比べて短い「帆立貝形前方後円墳」と呼ばれます。全長約74mで、後円部の径は約55m、墳頂部の径約25m、高さ約6.8mあり、後円部は3段築成、前方部は1段築成と考えられます。5世紀前半の築造と考えられます。

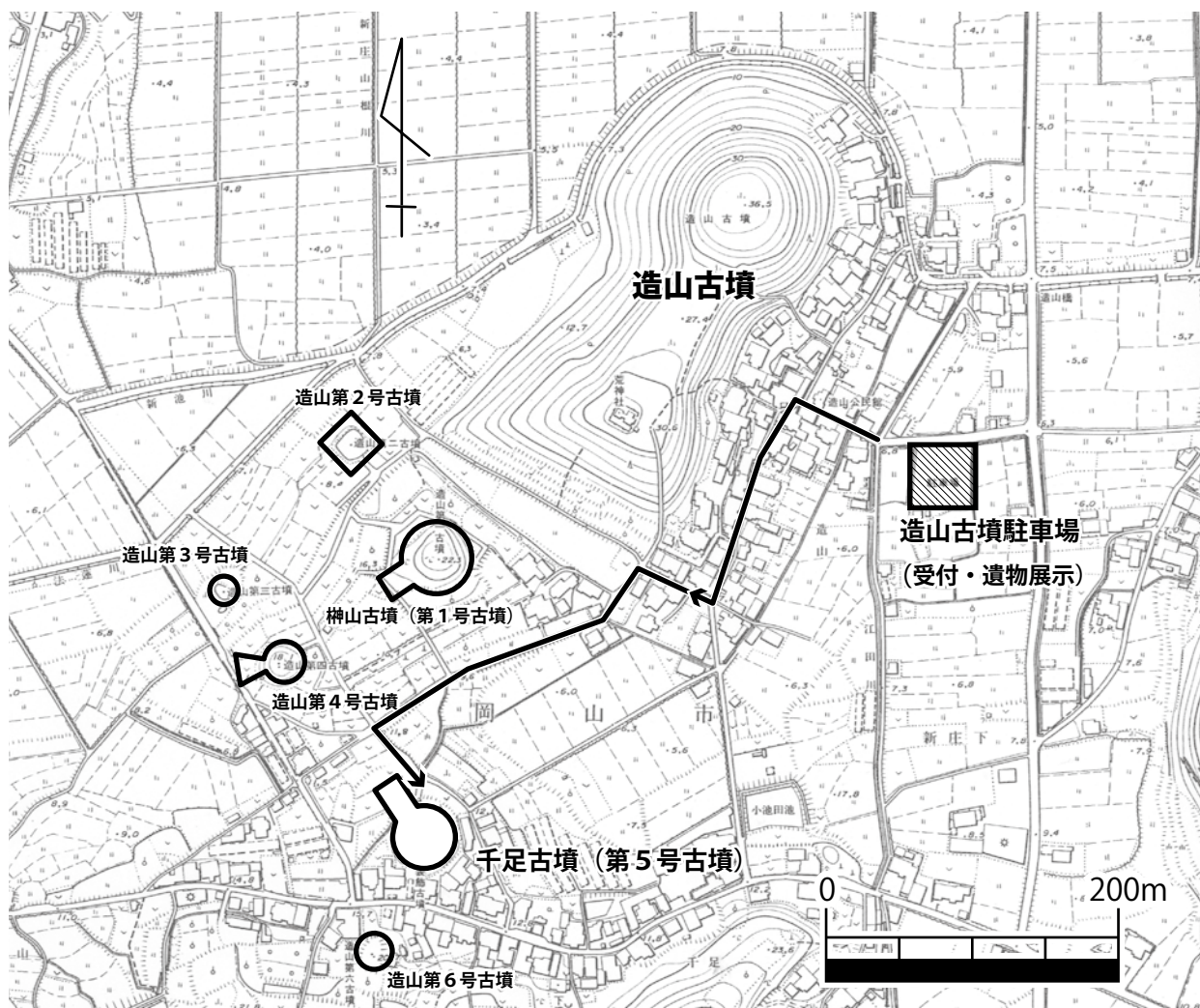


図1 遺跡位置図 (1/5000)

調査成果の概要

今回の調査は、千足古墳の規模や形状を調べることを目的としています。これまで知られている規模や形状は、表面観察からみた推定によるものでした。そのため見かけ上、前方部に見える部分が本当に古墳の一部であるのかという点は確定していませんでした。また、千足古墳の史跡指定範囲は現在後円部のみであり、将来的な古墳の保護のために古墳本来の規模や形状を調べる必要がありました。

調査の結果、現在は地中に埋もれている古墳の端部を確認できました。地山（基盤層）を掘り削って古墳の形を作りだしていることがわかりました。調査によって古墳の規模がわかりました。墳長約 80 m、後円部の径約 60m、前方部北端部の幅約 25 m、となり、従来より一回り大きな墳丘であることがわかりました。

今回の調査では古墳の盛土は確認されていません。千足古墳は 3 段築成ですが、盛土が確認されたのは 2010 年度に調査した後円部の 2 段目より上だけです。このことから、墳丘 1 段目は、基盤層を掘って外形を作ったと考えられます。この結果、古墳の周囲には外形を造り出した跡が、周溝状の掘り込み（周溝状遺構）として一部確認できました。さらにその周溝状遺構から多数の埴輪片が出土しました。埴輪片には朝顔形埴輪や靱形埴輪等が含まれており、靱形埴輪には直弧文が線刻されていました。直弧文のある靱形埴輪は、岡山県内では、これまで造山古墳で 1 点確認されているだけでした。造山古墳の性格や造山古墳群の築造関係を探る上で重要な成果といえるでしょう。

出土遺物

古墳の西側の調査区（図 2 の③⑤⑥⑩）を中心に、多数の埴輪が出土しています。その中で特に注目されるのが⑤から出土した靱形埴輪の破片です。これまでに 3 点出土しており、そのうち 1 点には直弧文が描かれていました。

靱形埴輪とは矢を収納して背負う武具である靱を模した埴輪です。直弧文とは、古墳時代の文様の一様で、直線と弧線を複雑に組み合わせで表現します。

直弧文が描かれた靱形埴輪は、奈良県御所市の室宮山古墳（墳長 240 m）、大阪府堺市の百舌鳥陵山古墳（伝履中天皇陵、墳長 365 m）など、近畿地方の巨大古墳を中心に分布しています。岡山県では造山古墳から採集されており、今回千足古墳から出土した靱形埴輪は県内で 2 例目になります。

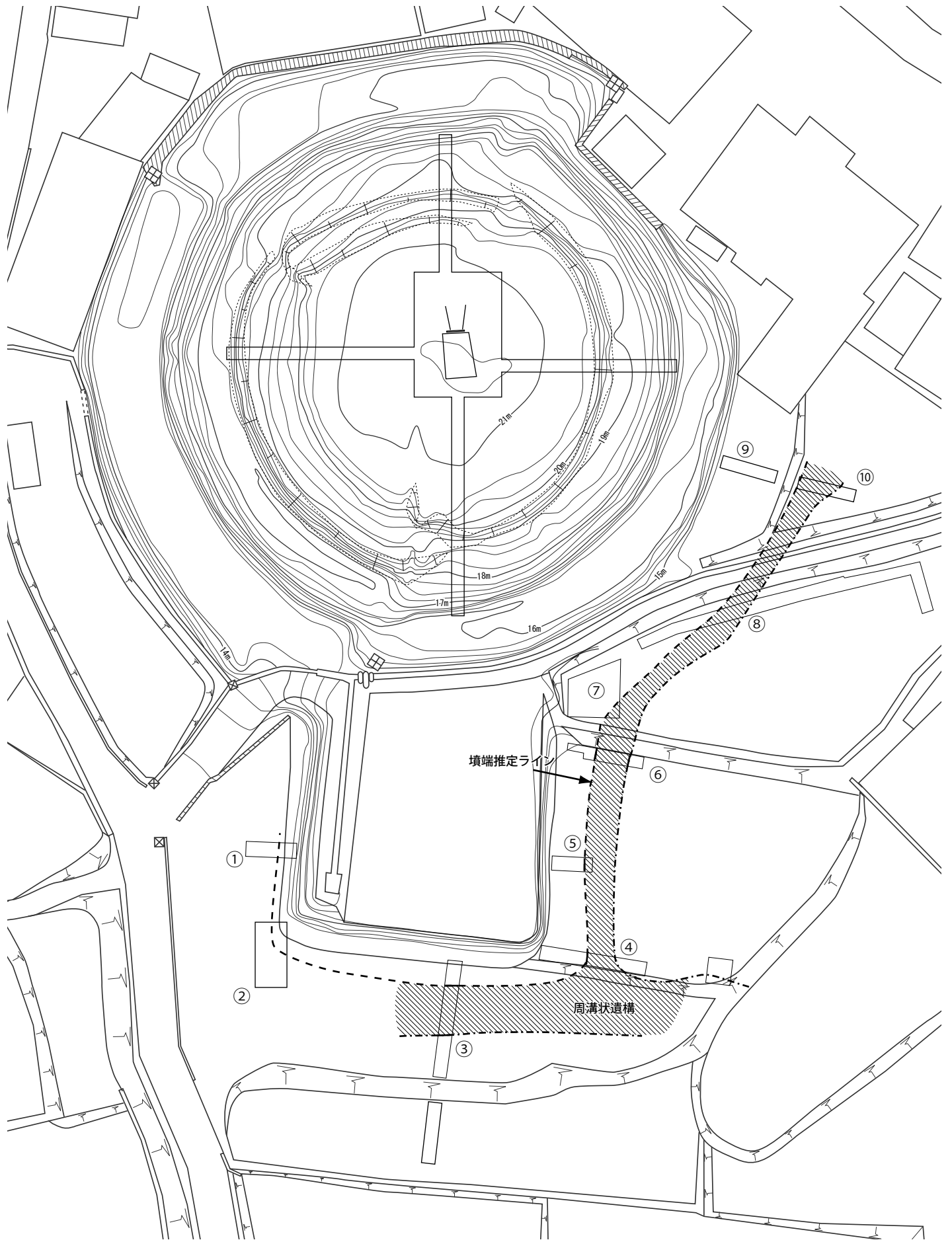


図2 千足古墳平面図 (1/400)



図3 千足古墳出土 鞞形埴輪片

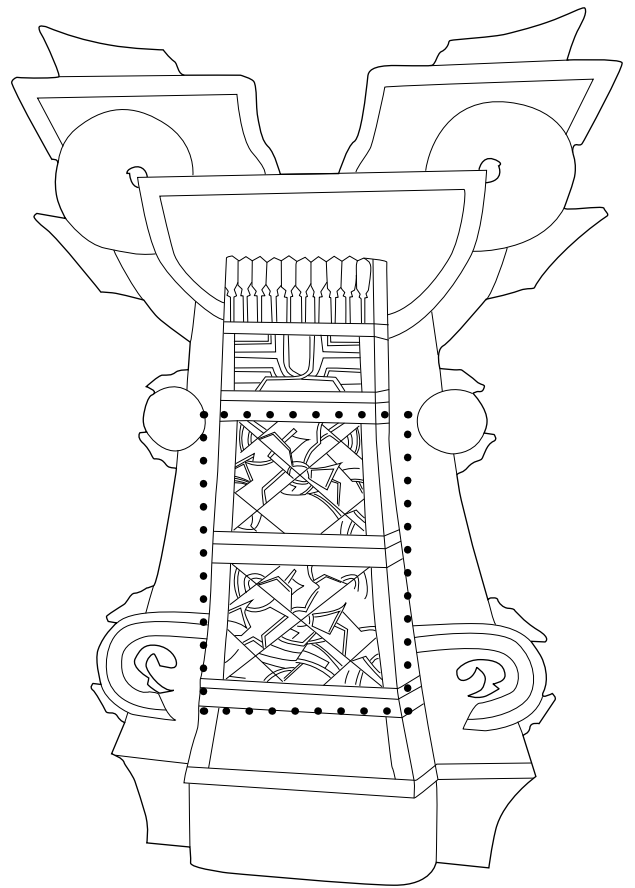


図4 鞞形埴輪模式図

※大阪府萱振1号墳より作成

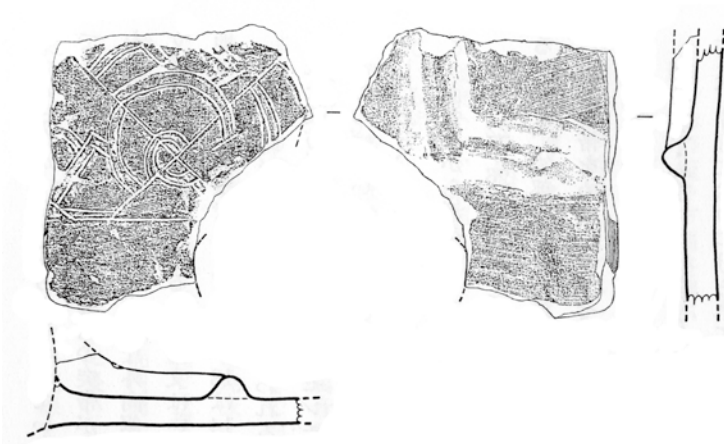


図5 造山古墳出土 鞞形埴輪片 (1/5)

※春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山県の歴史と文化』から引用